

## 優秀賞

「ほんとうの花を見せにきた」 桜庭和樹(文藝文春)

健康栄養学科 矢田 菜摘

この小説は3つの物語で構成されている。私が特に印象に残ったのは1話目の「ちいさな焦げた顔」である。この物語は一夜にしてある組織に家族が殺された主人公の男の子が、血の匂いに誘われて屋敷の中に入り込んだ吸血鬼ムスタアと出会う場面から始まる。その後、吸血鬼と人間は関わりを持ってはいけないという掟があるのにも関わらず、ムスタアは主人公の男の子を拾い、ムスタアの相棒である洋治という名の吸血鬼と一緒に暮らすようになる。この小説の中では吸血鬼のことをバンブーと呼んでいる。バンブーの大きな特徴は人間よりも長寿であり、容姿はある年齢から全く変わらず若いままである。バンブーは自分達とは違い命の火を燃やし日々成長していく主人公を見て幸せを感じ、自分達のもとから離れて自立した生活ができるようになるまで大事に育てようとする。一方人間である主人公は、通っていた学校の恩師が突然死亡した事件から、過去に殺された家族のことを思い出し、人間の命の火は意図せず突然儚く消えてしまうことに気づく。そして主人公は自分の命の火が消える前に、いっそ人間である自分がバンブーになってしまえば、より長くバンブー達と幸せに暮らせるのではないかと思うようになる。物語の後半ではバンブーになりたいと望む主人公と、人間として幸せに生きて欲しいと願うバンブー達との間で衝突が起きるようになる。

この物語の全体を通して人間の命の儚さと成長して生きていく価値について非常に考えさせられた。また最初はこれらの価値は命がないバンブーという存在がいるからこそ際立つものであると思っていた。しかし、物語が進むにつれてバンブー達が主人公を必死に育て守ろうとする姿に主人公への強い愛と命の火がバンブー達にも確かにあると感じた。

最後に人間と関わるという禁忌に触れてまでバンブー達が得たかったものを実際に読んで確かめて貰えれば幸いである。